

〔日本靈異記〕中方女示強力緣第廿七

尾張宿禰久玖利者、尾張國中島郡大領也、聖武天皇食國之時人也、久玖利之妻、有同國愛知郡片葩里之女人、是昔有元興寺道場法師之孫也隨夫柔儒、中此孃至彼里草津川之河津、而衣洗時、商人大船載荷乘過、

〔袖中抄十九〕は、き木

今勘國史云、仁明天明承和二年六月、勅如聞東海東山兩道河津之處、或渡舟數少、或橋梁不備、中造浮橋、令得通行、及建布施屋、備于橋寄、其造作料、共用救急稻云々、

〔更科日記〕下つふさのくにとむさしのさかひにて有ひと井がほといふ、かゝみのせ、まつぎとのわたりのつにとまりて、夜ひとよ舟にてかつくなどわたす、

〔宗長手記〕大永四年、中伏見津田備前入道、かねて約あり、穴よりて薪の山材木、この津より紫野へ車力の事、奉加申調へ、いまだ日も高く、いそぐに付て、宇治の川舟さしのぼらんといふに、發句所望に、

くれたけのなつ冬いづれよ、のかげ

〔東路のつと〕江戸のたてのふもとに一宿して、すみだ川の河舟にて、下總國葛西の庄の河内を半日計、よしあしをしのごをりしも、霜枯は難波の浦にかよひて、かくれて住し里々見えたり、おしかも、都鳥堀江こぐこ、ちして、今井といふ津よりおりて、淨土門の寺淨興寺にて、むかへ馬人待ほど、往持出て、ものがたりの序に、發句所望有しに、とかくすれば程ふるに、立ながら、

ふじのねは遠からぬ雪の千里かな

〔萬葉集十秋雜歌〕七夕

自古擧而之服不顧、天河津爾、年序經去來、

久方之天河津、爾舟泛而、君待夜等者、不明毛有寐鹿、